

中国延辺朝鮮族における 二言語教育の現状と課題について

金 蓮 淑

0. はじめに

中国吉林省にある延辺朝鮮族自治州は、隣接する朝鮮半島にそのルーツを持つ少数民族・朝鮮族の自治州である¹。1999年の統計によると、同地区に居住する朝鮮族の人口は約85万人であり、約200万人といわれる中国朝鮮族全体の4割以上が同地区に集中している。

多民族国家の中国では、民族的な差異が認識され、それが十分に配慮されている。少数民族の文化を維持発展させ、少数民族出身の人材を育成する具体的措置として、少数民族のための小・中学校では、国語である漢語の代わりに当該民族言語が教えられ、そのうえで漢語が外国語のように教えられるのである。各教科の教科書も漢語で書かれたものが、当該民族の言葉に翻訳されている。また少数民族出身者の大学進学に際しては、かれらを優先的に入学させる措置が講じられている。

このような民族政策のもとで、朝鮮族は1952年に小学教育を普及させ、1958年には初級中学教育を基本的に普及させ、中小学校入学率は98%、中華人民共和国56の民族のなかで教育レベルが高い民族と云われてきた。

しかし、中国の改革開放の深化と産業化、都市化の加速化によって、農業経済を中心とした伝統的朝鮮族社会は、これまでに経験したことがない大きな衝撃と試練に直面することになった。なかでも特に深刻なのが、朝鮮族教育である。朝鮮族教育が抱えている問題点として1)朝鮮族学校の生徒の数が減少している問題、2)朝鮮族生徒が漢族学校へ通う比率が増加している問題、3)片親、両親がいない生徒が増加している問題、4)朝鮮族中小学校の教師陣が不安定であり、資質が高くない問題、5)朝鮮族学校の経費の問題などがある。朝鮮族教育の興亡は、朝鮮族民族の主体性の保持と直接関わることである。

本稿は、以上のような観点から、中国延辺朝鮮族における2言語教育の現状と課題に焦点をあて、原因を分析し、今後、中国延辺地域の朝鮮族が取るべき道について論じる。

1. 先行研究と問題の所在

中国延辺地域の朝鮮族の言語問題と民族意識に関しては、藤井(1993)、小川(1997)、清水(1997)、出羽(1998a、1998b、1998c)、岡本(1999)などの論文・調査報告がある。これらの先行研究は、面接調査やアンケート調査などを通して中国朝鮮族の言語問題と民族意識に接近しようとしている点において、貴重なものと評価できる。特に藤井報告は、朝鮮族大学生の日常生活における言語使用状況や、祖父母・父母の言語運用能力、次世代の教育問題にかかわる事項などについて目配りがなされており、示唆される部分が多い。

しかし、中国延辺朝鮮族の現実性を伝えてその方向性を示すことに関しては、若干の問題を内包している。小川論文には、2言語習得の困難さについて、「2言語主義は簡単に達成できる目標なのであろうか。少なくとも西洋世界では2言語主義の困難さを露呈するような研究報告がなされている中で、延辺は特異な地区なのであろうか。」と述べて、いろいろな調査結果から朝鮮族が漢語を自由に使いこなすことは難しいという結論を出している。しかし、この点について、私は違った意見を述べたいと思う。さらに出羽論文にも疑問がある。そこには、民族教育の問題点として、生徒の民族意識を高めるためには、民族固有の科目である「朝鮮語文」の重要性をどのように高め、民族言語に対する生徒の理解をどのように深めていくかについて真剣に模索していく必要があると述べている。しかし、現在もっとも切迫した問題はこれではない。延辺大学英语専攻朝鮮族学生の朝鮮語、漢語の2言語調査からもわかるが、30名全員が自分の朝鮮語が漢語に取り替えられることを希望していないと答え、朝鮮語の前途については、その53.3%の学生が楽観的な態度をもっている²。この点からも、朝鮮族生徒は、自分の民族言語に関して強い感情を持っていることがわかる。

このような問題点と疑問点に焦点をあて、第2節では、中国延辺地域における朝鮮族教育のなかでもっとも深刻な問題を取り上げ、その原因を分析する。第3節では、2言語使用の現状について、会社を例にあげ分析する。第4節では、学校での2言語使用の現状について論じる。第5節では、2言語教育の必要性について分析する。第6節では、2言語教育の教育実験と展望について論じる。そして、第7節では、まとめとして、中国延辺地域の朝鮮族が取るべき道について論じる。

2. 中国延辺地域における朝鮮族教育の問題点

農業経済から工業経済へ、計画経済から市場経済への転換とともに都市化の加速化によって朝鮮族教育は新しい挑戦に望んでいる。そのなかでもっとも問題になっているのは朝鮮族学校の生徒数の急激な減少により、今後中国朝鮮族教育がどのようにしていくのかといった問題である。

90年代延辺朝鮮族学校の生徒数の変化を見ると、朝鮮族小学校の生徒数は1990年から

1997年までは大体落ち着いており、小学校の生徒数は年平均83,504名程度であったが、1998年からは下降線をたどり、2000年には37.55%減少した。入学生数は、1990年から1995年までは年平均14,324名であったが、1996年からは下降し、2000年には64.1%減少した³。

この原因は主に二つある。一つは、全朝鮮族の出生率が下降していることにある。中国の改革開放政策および都市化、産業化によって中国朝鮮族社会では、史上空前の人口大移動のブームが起きた。農村から都市への移動、東北から山海関以南地域への移動、国内から国外への移動などその形式が多様化しているだけでなく範囲もかなり広い。特に問題となるのが出国のブームとしての人口移動と人口消失である。80年代半ば以後、海外進出が可能になってからは、親戚訪問、海外研修、出稼ぎ、国際結婚、海外観光などによる海外進出がますます増えているが、なかでも、朝鮮族女性の国際結婚は深刻な社会問題になっている。女性の海外への移動および海外への定着は、単に朝鮮族集団の人口消失をもたらすばかりでなく朝鮮族の人口のマイナス成長になっている。

もうひとつは、朝鮮族生徒のなかで漢族学校に通う数が急激に増加していることである。現在、改革開放に従う市場経済の発展、民族間の交流の拡大と頻繁な人口移動、朝鮮族の生活環境と職業構造などの変化は、朝鮮族社会と民族教育の基を根底から揺るがしている。朝鮮族社会と教育は未だない同化危機に直面しているのである。その原因を延辺朝鮮族自治州教育委員会⁴（1999）は、次のように説明している。

- （1）人口の多量的移動、農村教育の荒廃によって都市へ進学できない生徒は近隣の漢民族の学校を選ぶ以外に方法がない。
- （2）改革開放に従い朝鮮語の社会的影響力が縮小することにともない、漢語の必要性は相対的に増大し、都市地域の朝鮮族に漢民族学校を選び好む傾向が強く現れている。中国に住んでいるのであれば漢語が上手になる方が良いと思うのが現在の若い親達の普遍的な考え方である。
- （3）朝鮮族学校の漢語教育が生徒とその親達の需要を満足させていない。同じ学校教育を受けても、一旦社会に出た後、朝鮮族の生徒が経ている隘路は漢民族よりも多くが、そのなかでもっとも大きな問題が言語の問題である。

上で、もっとも大きな問題として指摘されている言語の問題というのは、朝鮮族学校の2言語教育に関わることである。そこで、朝鮮族学校の2言語教育の歴史を見ていくことにする。その歴史は、次のように三つに分けられる。

初級規模期：（1945－1965） この時期の朝鮮族教育は、朝鮮語教育を軸に右往左往していた。抗日戦争が終わり、新中国が成立するまでの間（1945－1949）、朝鮮族地区は、日本の奴化教育制度を廃止して、朝鮮語文字を使用して授業を行った。1948年延辺地区朝鮮族中学校では、朝鮮語、漢語二つの言語科目を設置して、朝鮮語は週6時間、漢語は週3

時間授業をするようになった。1949年3月、延辺大学が設立され、各科目の授業は朝鮮語で行い、中国語文（漢語文）⁵の授業が増加された。1950年8月、中華人民共和国国家教育部は「中学暫定教科課程」（草案）のなかで、少数民族の初級中学校では「国語と民族語を同時に教える」よう定めた。これが中華人民共和国における少数民族2言語教育の公式的な始まりだといえる。1951年漢語授業は、小学校5年生から始まっていたが、1957年にはさらに小学校3年生に引き下げられた。この時期の朝鮮族小、中、高校は、2言語授業の体系がつくられ、一定のレベルを持つ2言語話者を育成していた。

破壊期：（1966—1976）この時期は、中国の「文化大革命」の10年にわたる動乱により、朝鮮族の2言語教育は、甚だしく打撃を受けた。朝鮮語無用論の影響で、50%近くの朝鮮族中小学校が合併あるいは廃校にさせられて、70—80%の朝鮮族学生が漢族学校へ転学した。

全面発展期：（1976—）この時期は、2言語教育の回復時期である。朝鮮族学校の授業が回復されるとともに、民族語で大学の試験が受けられるようになり、朝鮮族学校の教育の質が高められた。また、朝鮮族中小学校の課程が変更され、漢語の授業は、小学校2年生あるいは1年生から始まり、中学校では、外国語が設置された。したがって、1985年には漢族学校へ通っていた大勢の学生が戻ってきたが、近年、朝鮮族生徒の漢族学校への流出傾向が再び強まりつつある。

統計によると⁶、朝鮮族生徒の漢民族学校へ入学する比率は年々増加の趨勢を見せている。1985年は朝鮮族小学生の3.6%、中学生の12.3%が漢民族学校で勉強していたが、1997年にはそれぞれ11.4%、6.3%に、1999年に至ってはそれぞれ12.2%、8.5%に上昇している。漢族学校へ入学する比率がもっとも多い安図県では21.96%を占めている。

このような朝鮮族生徒の漢民族学校への流入、朝鮮族社会での漢民族学校への選り好む傾向の増加趨勢は結局朝鮮語盲の増大を意味し、朝鮮語盲の増大はまた朝鮮族の同化と緊密に繋がっている。なぜなら、社会生活の疎通手段だけでなく民族文化の中心としての民族言語の消失は、その民族の同化を意味しているからである。そのうえ、このような同化が強制的政策の同化ではない民族自らの自然的同化の場合それが民族主体性にもたらす影響はもっと深刻である。大多数の親たちは、朝鮮族として朝鮮語も勉強しなければならないが、漢語がうまくできるためにはやむをえず漢族学校へ通わせるしか仕方がないといっている。上述の歴史から見ても、1948年に、漢語授業を朝鮮族学校へ設置してから、現在半世紀が過ぎているが、始終漢語と朝鮮語両方がうまくできるといった要求に到達できていないために、朝鮮族生徒の漢族学校へ通う数は増えている。この事実は、朝鮮族学校教育の社会需要と個人の進路開拓の需要に充分適応できていないということである。

言い換えると、朝鮮族学校の教育改革と2言語教育が社会発展の需要に適応できていないのである。だから伝統的な2言語教育の模式を根本的に改革する必要があるのである。

3. 実社会での 2 言語使用の現状

工業、商業分野というのは、多地域との繋がりが多く、人の往来が頻繁で、主に政治、経済、文化的に発展している都市に集中している。したがって、ある意味、この分野の言語文字使用は、ある時期の社会全般における言語文字生活の動きを見る尺度になりうる。

そこで、延吉市タバコ工場、延吉市第一デパート、延辺新華印刷工場などの言語使用状況を見ることにする。

- 1) 日常での仕事と生活においては、朝鮮族の間では、朝鮮語を使い、朝鮮族と漢族の間では漢語を使う。
- 2) 看板、スローガン、営業許可書などは、すべて朝鮮語、漢語ふたつの文字で書かれている。賞状、栄誉証書、コマーシャル、広告なども、ほとんど朝鮮語、漢語ふたつの文字で書かれている。
- 3) 各種の会議と活動は、漢語で行う。延辺新華印刷工場は、従業員 905 名のうち、朝鮮族が 635 名、漢族が 267 名、満族が 3 名と朝鮮族が 70%を占めているが、会議は、すべて漢語で行う。また、小組⁷会で漢族が一人でもいるならば、漢語で話す。
- 4) 工場で生産されている生産品の名称、説明書はほとんどが漢文で書かれ、サービスの経営品目、ラベル、値段表などもほとんど漢文で書かれている。
- 5) 上級機関からの文書などは、ほとんど漢文で書かれている。

したがって、漢語は現実社会で不可欠なものといえる。客観的にみても、中国という大きな漢民族文化圏のなかで少数民族が持っている限界を克服するためには、漢語を上手に使わなければならないと思われる。

4. 学校での 2 言語教育の現状

民族学校においては、民族語である朝鮮語と中国全土の公用語である漢語の双方の能力を高めることを目的とした語学教育が行われている。特に初等教育において、朝鮮語教育が重視されている。東北民族教育出版社提供の資料によると、1999 年現在、朝鮮族小学校では 1 週間に 6-8 時間の朝鮮語の授業が行われているのに対し、漢語の授業は週 3-4 時間である。一方、中学校では朝鮮語週 3 時間に対して漢語週 3-4 時間と、朝鮮語の比重は相対的に低くなる。また、中学校からは外国語（週 4 時間）が新たに加わるため、生徒の語学学習負担は重くなる。このような語学教育の時間配分は、高校においてもほぼ同様である。以上の現実、朝鮮族生徒が 2 言語（漢語と外国語）のみを学習する漢族生徒に比べて、より多くの学習負担を強いられていることを物語っている。

朝鮮族の幼稚園、小学校、中学校では、漢語の授業以外は、朝鮮語で授業をする。高校では、漢語の授業のほかに、数学と理科が、朝鮮語で行われるが、板書は漢語で書かれる⁸。

大学では、延辺大学の朝鮮語専攻と中央民族大学の朝鮮語専攻をのぞけば、漢語ですべての授業が行われる。

以上をまとめると、①朝鮮語は日常生活のなかでの主要な言語であるが、漢語との2言語併用は増加にある。②学校教育では、朝鮮語は初級段階では使用されているが、高等教育の段階では、一般に卒業まで漢語が使用されている。

5. 2言語教育の必要性

朝鮮族はもともと中国に移住して以来、漢族とともに協力して東北辺境地域を開発し、建設してきた。そうした社会的条件から、漢族の言語である漢語を学ぶ必要性が生じた。ただし、解放直後は平等・団結・相互扶助の新しい民族関係が樹立されたばかりであり、社会がなお小農経済を主とする状況にあったがため、民族間の交流もまだ密接でなかった。そもそも当時の朝鮮族は集中して居住し、延辺地域の大多数を占めていたので、漢語を学習する必要性はまだ朝鮮族社会のなかで差し迫った問題とは考えられていなかった。しかし、1950年代中頃になると他の民族との往来が日増しに盛んになり、漢語の社会的需要が次第に拡大し、人々の間に「漢語を学びたい」と願う気持ちが急速に高まった。特に、市場経済の発展にしたがって、朝鮮族の活躍する舞台が広がるにしたがって、朝鮮族の学校教育の中でも「漢語の授業を強化してほしい」という要望が高まった。

さらに、漢語の教育意義として、朝鮮語の使用範囲が漢語に比べて狭いため、進学や就職の面で不利な点がある。延辺の朝鮮族学校を卒業した場合、相対的に朝鮮語のレベルが高く、漢語のレベルが低いので、進学後漢語で行われる授業を受けるのが難しくなり、ついていけないなどの問題が提起されている。大学で勉強している学生や延辺以外に就職している朝鮮族学校の卒業生の話を借りると、「大学に進学した後、授業を聞くのが難しいし、授業筆記もきちんとできない。また、社会に出た後、人との交流とか仕事を漢語でうまくできない。だから、母校の漢語授業の改革をし、社会の需要に適應させてほしい⁹。」といった声があるが、これは個人的、かつ、小範囲なものではない。なぜならば、朝鮮族生徒の大学に進学する人数が1977年以来、ずっと上昇趨勢を見せているからである。

次頁の表に見るとおり、1978年に朝鮮語で大学試験を受けることができるようになってから、重点学校に進学する朝鮮族生徒はますます増えている。また、大学に進学した生徒の人数も1982年以後、増加している。卒業した後、彼らの多くは、社会で中堅として活躍している。彼らの自らの体験は、朝鮮族中小学校の2言語教育に促進をうながし、漢語授業の質の向上にも作用している。就職時または、昇進時に漢語の能力によって差をつけるという明確な法的規定は存在しないが、現実の社会では漢語能力による制限が設けられているのである。

朝鮮族の活躍の場が自治州内に限られるのであれば、まだそれほど問題は起きていない

表 1977－1988年延辺地区朝鮮族生徒の大学進学状況表

| | 進 学 人 数 | 延辺地区の進学学生 総数の割合(%) | 重点大学の進学数 |
|------|---------|-----------------------|----------|
| 1977 | 638 | 53.5 | |
| 1978 | 664 | 58.7 | 73 |
| 1979 | 667 | 69.76 | 114 |
| 1980 | 695 | 61.66 | 154 |
| 1981 | 611 | 55.1 | 117 |
| 1982 | 812 | 65.58 | 256 |
| 1983 | 960 | 71.5 | 277 |
| 1984 | 1110 | 61.9 | 262 |
| 1985 | 1152 | 61.7 | 274 |
| 1986 | 1209 | 62.2 | 193 |
| 1987 | 1050 | 52.9 | 156 |
| 1988 | 1483 | 59.5 | 402 |

出典)「東北民族教育史」遼寧大学出版社、1994年

が、特に高学歴者にとって活躍の場は州外になることが多いため、その重要性はますます高まっている。

延辺の朝鮮族にとって競争相手は州内の人間ではなく、むしろ全国各地の人々だからである。それゆえ、朝鮮族自ら漢語の重要性を認識している。

朝鮮語教育の意義として、전(2000)は、中国の朝鮮民族の中で、部分的に同化している現象はやむをえない、また、一部の少数民族の中でも民族言語、民族教育が消失している現象が現れているが、中国朝鮮族の民族教育と民族言語教育はずっと発展していくと述べている。その理由として1)中国の朝鮮族は越境民族として、移住後の歴史が短い。2)朝鮮族自体は、北朝鮮と韓国で独立国家を形成し、朝鮮語が国語となっている。最近また、韓国との貿易関係もある。3)朝鮮民族は民族自尊と主体性が強い。4)自分の言語と文字がマスコミの中でもちいられる。5)民族教育と民族言語教育を大切にする伝統と民族教育と民族言語教育が失われた経験がある。6)民族教育、民族言語教育が小学校から大学まで一連の体系を形成している。7)民族教育、民族言語教育の存在と発展のためのいろいろな努力が続いている。

したがって、朝鮮語を母語としてその発展を目指しながらも、漢語に精通するという2言語主義が朝鮮族がもつに至った結論なのである。

6. 2 言語教育改革の実験と展望

2 言語教育は、朝鮮族中小学校教育の重要な特徴と内容になっている。朝鮮族中小学校の 2 言語教育の質と効率を高めるために、延辺民族教育改革辦公室では、1988 年秋から種類の違う 15 校、70 のクラスで、ふたつの言語科目の学習順序や開始学年、授業時数の比率、学習終了学年や修学年数、教科書や授業方法などに関する試験的授業を行った。

朝鮮族小学校の漢語文科目の学習開始学年を引き下げる実験：この実験は、延辺朝鮮族自治州の朝鮮族小学校において、漢語を話す能力が劣っており、小学校卒業の時点でもほとんどの者が発音の壁を突破できず、簡単な会話もできず、まともな短文さえ書けない生徒が多かったために行われた。話し言葉から始めて聞く・話す訓練を強化し、口頭による表現能力を高める。また、漢語ピンイン字母に習熟してその多面的機能を働かせ、まだ漢字を知らないか又は識字数が非常に少ないという状況で早いうちに話し言葉を学ぶ。漢字を読み・書き・覚える識字授業は漢語学習の中を含め、目標は漢語を聞く・話す・読む・書く能力を養成することであった。この実験は 5 年間にわたる改革実験の結果を踏まえて、自治州教育委員会は、1993 年 4 月の時点で、「自治州のすべての朝鮮族小学校は 1993 年 9 月より漢語文科目の授業を一年次から開始する」と決定した。

朝漢文混用教学実験：この実験は、朝鮮語と漢字とが切っても切れない繋がりをもっており、朝鮮語の語彙のうち約 70%が漢字語であることに注目している。同じ一つの漢字を、漢族は漢語で読み、朝鮮族は朝鮮語で読んでも、その漢字に対する理解の妨げにはならないといった漢字には超言語的な利点がある。したがって、もし漢字というこの共通の要素を架け橋として利用するならば、徐々に語彙数を増やしていき、各科目の教科書に出ている常用漢字と専用漢字を身につけさせ、漢語文で書かれた学習参考書や課外読み物の困難さを解決し、生徒の読書と作文能力を高めることができる。さらに、朝鮮民族が 2000 年来漢字を使っていた民族文化の伝統をも発展させることができる。この実験は、延辺龍井朝陽川一中などの学校で行われた。

漢語文五課型教学法実験：これは、朝鮮族学校の漢語の授業で、教えることを重視し、学ぶことを軽視してきた。また、授業時間数は多いが、生徒の話す能力と作文能力は同年代の漢族学校の生徒に比べレベルがはるかに低いという現実問題に対して設計された。この実験は、生徒の聞く、話す、書く、読む能力を全面的に高めて、2 年間の間に教学大綱に規定した 3 年間の授業任務を遂行させて、生徒の漢語のレベルを同年代の漢族学校のレベルに近づけた。

2 言語教育の実験成果は、教育行政の決定に科学的な根拠を提供する。2 言語教育の研究と実験は続いているが、今注目されているのは、高校段階での漢語レベル試験 (HSK) を行っていることである。1999 年 12 月に延辺の二つの朝鮮族高校の実験クラス生徒の 228 名がこの試験を受けたが、生徒全員が、国家教育部が規定した中等漢語レベル C 級 (6 級) に到達した。

現在まで、朝鮮族学校の2言語教育は、二つのタイプの朝、漢2言語話者を育成してきた。一つのタイプは、教育を受ける前に朝鮮語を習得したものであり（Aタイプと略称）、もう一つのタイプは、教育を受ける前に漢語を習得したものである（Bタイプと略称）。関（2001）の調査によると、Bタイプの人たちの漢語のレベル、特に話し言葉のレベルは、Aタイプの人よりかなり高い。朝鮮族学校はAタイプの人には漢語を教え、Bタイプの人には朝鮮語を教える。小学校ではBタイプの子供に「沈没式」と呼ばれる方法を使って朝鮮語を教える。周りが全部朝鮮語で、開始段階は難しいが、朝鮮語半分、漢語半分から段々とすべてにおいて朝鮮語を使うようにする。これは時間が短く、効率が高いという特徴がある。Aタイプの子供に対して、朝鮮族学校で採用しているのは、言語の学習であり、言語の習得ではない。漢語の授業だけ、教師が漢語で教え、後は全部朝鮮語で話す。したがって、Aタイプの子供の漢語は一つ一つ学んだものであるが、Bタイプの子供の朝鮮語は朝鮮語という海洋の中から拾ったものだと言える。これは、カナダのイマージョン教育と似ているところがある。カナダのイマージョン教育が成功したのは、第1に、カナダの2つの威信のある多数派言語、フランス語と英語のバイリンガリズムを目指している点にある。第2に、カナダのイマージョン式バイリンガル教育は、自由選択であるという点にある。親が子供をイマージョンの学校に通わせることを選ぶのである。親からの勧めと教師のかかわりが、子供のやる気を高める手助けとなる。第3に、早期イマージョンでは、最初の1年半の間は、子供たちが教室内のコミュニケーションに家庭の言語を使用してもよいことが多い。遊び場や食堂でフランス語を話すよう強制されることはない。子供たちの家庭の言語は尊重され、軽視されることはない。第4に、教師は2言語とも流暢に使用できるバイリンガルである。第5に、生徒はみな同じように、それまで第2言語に触れたことがない状態でイマージョン教育を始める。第6に、イマージョン教育を受けている生徒は、「コア」プログラムで学んでいる一般の生徒と同じカリキュラムで学ぶ。

2言語教育の改革でカナダのイマージョン教育方法を採用できる。漢語で授業を行って、生徒に漢語という環境の中で言葉の勉強をさせる。同時に民族言語が漢語に同化するのを防ぐ。そして、実際、この考えを先取りするかたちで、朝鮮族の高級中学校では、理数科系の科目に漢語を用いて授業を行っている学校が現れているのである。もし、朝鮮語、漢語2言語で授業を行うと、民族言語の地位が落ちて、民族語の存在と発展に影響を与えるかまたは脅かされるのではないかとといった心配もあった。しかし、こういった改革をしなければ、民族学校は生徒を失ってしまい、また中国という社会環境に適応できない生徒ばかりになり、民族教育、ひいては朝鮮族自体の存在と発展に悪影響をもたらすことになる。

したがって、2言語の関係をうまく処理すれば、2言語を兼ね備えた人材の育成という目標は達成できるはずである。

7. まとめ

以上、中国延辺朝鮮族が抱えている問題点と 21 世紀の発展展望について述べてきた。重要な問題は、どのように当面の危機を克服し、民族性を守りながら、近づいてくる未来社会の挑戦に応じていくかである。言い換えると、伝統的教育の模式から、民族性と世界性を結び付けて民族教育の現代化を促進することである。そのためには、観念を更新し、改革開放の趨勢のなかで、2 言語教育を突破口として、民族教育の改革を促し、教育の質を全面的に高めるが不可欠である。そうすることで、中国延辺朝鮮族の教育は、発展するはずである。

¹ 延辺は、延吉市、图们市、和龙市、龙井市、浑春市、敦化市、安图县、汪清县からなっている。

² 崔玉芹(1998)「延辺大学英语系朝鮮族学生朝汉双语状况调查」第3期『延辺大学学报』。

³ 「延辺朝鮮族自治州教育調査資料」1990-2000年の統計による。

⁴ 延辺朝鮮族自治州教育委員会(1999)『全州民族教育情况回報』。

⁵ 漢族学校では中国語文というが、民族学校では漢語文という。

⁶ 延辺朝鮮族自治州教育委員会(1999)『全州民族教育情况回報』。

⁷ 「小組」というのは日本の「班」にあたる。

⁸ 筆者が勤めていた図門市第1高級中学校。

⁹ 韩惠淑 吉林省龙井市小学「汉语文课会话教学实验报告」。

参考文献：

1. 박금해(2000)「21세기 중국조선족교육의 발전진로에 대한 사고」『문화산맥』 제6기
2. 藤井幸之助(1993)「中国朝鮮族の2言語使用及び民族意識に関する予備調査」徐龍達先生還曆記念委員会編『アジア市民と韓朝鮮人』日本評論社
3. 小川佳万(1997)「中国における少数民族文化と尊重理念の展開—延辺大学を取り巻く言語問題」『大学論集』第27集 広島大学大学教育センター
4. 清水登(1997)「延辺朝鮮族自治州における漢語教学の歴史と現状」『コミュニケーション学科論集』第3期
5. 出羽孝行(1998a)「中国の朝鮮族学校における教育課程に関する考察」『関西教育学会紀要』
6. 出羽孝行(1998b)「中国・延辺の朝鮮族の民族教育」『関西教育学会紀要』
7. 出羽孝行(1998c)「中国の朝鮮族学校に関する研究」『関西教育学会紀要』第22号
8. 岡本雅享(1999)「中国における民族教育と朝鮮族—2言語教育を中心として」『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社
9. 전학석(2000)『중국조선족언어문자교육 사용 상황연구』연변대학출판사
10. 延辺朝鮮族自治州人民政府(1992)「搞好双语教学提高民族教育质量」『民族教育研究』
11. 姜永德(1992)「延辺的汉语教学」東北朝鮮民族教育出版社汉语文编室编『朝鮮族中小学汉语文教学四十年经验论文集』東北朝鮮民族教育出版社
12. 최문식(2002)「중국조선족교육의 회고와 전망」
13. 王瑜(1988)「延辺地区双语教育探析」『延辺大学学报』第4期
14. 关辛秋(2001)『朝鮮族双语现象成因论』民族出版社
15. 장세일(2002)[향후 중국 조선족교육의 발전 전망]
16. コリン・ペーカー「岡秀夫訳・編」(1996)『バイリンガル教育と2言語習得』大修館書店。